

と相容れざるが如し、Ranstedt氏は此の點に就きては少しも顧慮する所無く、只だ碑文の此の一節が回鶻の首都 Kara Balgassun の建設を語るものなるが故に、甚だ興味深きものなりとなせども (Dieser Passus ist sehr interessant, da hier von der Gründung der Hauptstadt der Uiguren, Karabalgassuns, die Rede ist) 思ふに北方より徙りて Kara Balgassun を回鶻の牙營と定め、其の基を開きたるものは唐書の記載の如く裴羅なりしが、裴羅は其の可汗を稱したる天寶三載後僅かに三年、即ち天寶六載には早くも死歿したること、前に見たるが如くなれば、其の牙營の地に於る土木の事業の如きは未だ進捗せざりしなるべく、茲に於てか磨延啜の時に於て、其の地に宮殿家宅の建設を見るに至れるものと解釋すべきものなるべし。されば唐書の記載と磨延啜紀功碑との間には、實は何等矛盾の存するものある無く、却りて之によりて、回鶻部が年を遂ふて漸次其の勢を固むるに至りたる有様を推知せしむるに足るものなりと曰ふべし。

茲に附記すべきは回鶻と奚・契丹との關係なり、此等の兩部は其の住地も相隣接し、突厥に對する行動に於ては、常に一體を成したるものなるが、回鶻との關係につきては史の記する所極めて乏しく、其の實相を得ること極めて困難なりとす、されど今零碎の記録によりて之を推究すれば、唐書契丹傳には

契丹在開元天寶間、使朝獻者、無慮二十、故事以范陽節度、爲押奚・契丹使、自至德後、藩鎮擅地、務自安、障戍斥候、益謹不生事于邊、奚契丹亦鮮入寇、歲選酋豪數十入長安、朝會每引見、賜與有秩、其下率數百、皆駐館幽州、至德寶應時再朝獻、大曆中十三、貞元間三、元和中七、太和開成間凡四、然天子惡其外附回鶻、不復官爵渠長」